

平城宮跡・藤原宮跡の整備

庶務部・平城宮跡発掘調査部・建造物研究室

朱雀門復原整備 朱雀門は昨年度から復原工事を開始し、昨年度において、素屋根、資材保管棟、木材保管庫などの仮設物の建設を完了し、また、全体量の約7割の木材を購入した。化粧材は内地産檜、野物はヒバ、桐などである。

今年度においては、残りの木材を購入するとともに、木材の加工・組立に着手した。表面の仕上げは奈良時代の工法であるヤリガンナ仕上げとした。12月3日には立柱式のはこびとなり、年度末までに初重の柱18本が立った。また、初重の組物の加工を終えた。(村田健一)

遊水池・水路の整備 東院の整備に関連して、遊水池と水路の整備を行った。これらは、平成5年度の委託調査「第一次大極殿院地区復原整備のための基礎調査その2(水路・水系調査)」の成果に基づいて実施したものである。遊水池は、第二次朝堂院地区と東院地区の間に、南北に二段連続するかたちで造成した。最大貯水量は、北の遊水池が約3400 m^3 、南が約3600 m^3 である。また、水路については、小子部門の北方から門の西および南を通してさらに宮南部の東辺を近鉄線までまっすぐ伸びる既存水路の線形改良・水路幅改良などの改修を実施した。これにより、常態的に見られた小子部門付近の溢水状況が解消したほか、降雨時に右岸に溢水していた小子部門以南の水路の状況も改善された。さらに、近鉄線以南の宮東辺でも水路の改修を行った。(小野健吉)

造酒司井戸および東駐車場の整備 遺構展示館は現在のところ平城宮跡の東側の利用拠点となっており、この東に隣接する東駐車場は遺構展示館等周辺施設へのエントランスのみならず、整備中の東院庭園地区への導入路としても機能する重要な施設である。ここは造酒司跡を中心とした区域で、造酒司の区画を表示するために南側および西側の築地堀跡を歩行者・自転車用通路とし自然色舗装を施した。区域の中央部南北に東院庭園地区に向かうための宮内道路幅員6.0mを設けた。道路心は再検討がなされた小子門心の国土方眼座標系に合わせ、道路の構造は自動車交通の可能なものとし自然色舗装を施した。この道路の両側には乗用車で8～24台駐車可能な区画を設けインターロッキング舗装を施し、その周囲には植栽帯を配した。これは駐車場用の舗装面が広がることを避け、植栽により景観を和らげることを目的としたものであり、南に下がる地形の高低差をこの植栽帯で解消した。第241次調査で検出した六角形の井戸屋形を伴うと考えられている石敷の井戸およびそれに伴う石組排水溝についてはレプリカを制作していたが、これを埋め戻した遺構上に設置して、展示することになり、レプリカの退色と劣化を避けるため、遺構の井戸屋形と相似形の柱配置をもつ六角形の覆屋(鉄骨平屋建、建築面積約176 m^2)を建設した。屋根頂部にトップライトを設けたが、夜間景観にも配慮し、柱の最上部には天井を照らす間接照明器具を施し、見学用デッキの床下にはレプリカを照らす照明器具も設けた。また、覆屋と遺構展示館をつなぐ歩道を設けた。この区域全体での駐車可能台数は115台で、今年度施工分は覆屋の南まで約3,600 m^2 であった。(内田和伸)

東院庭園の復原建物

平城宮跡東院庭園地区の復原整備では、建物の復原が計画されている。平成6年度には、平成5年度工事分の東面大垣、南面大垣、南門、北東建物が竣工し、中央建物の復原設計をおこなった。中央建物の復原検討については別項とし、以下に竣工建物の概要を記す。

南面大垣 東院地区の南を限る築地大垣である。小子門東から東院南東隅まで約200m分の復原が計画されているが、平成6年度は小子門東から里道敷地まで69m、6mの里道敷地をはさんで東院南門まで27m、南門から東43mの合計139mが竣工した。築地は基底幅が2.7m（9尺）、高さが3.5mで、東下がりの敷地にしながら勾配を持つ。構造は既存の復原大垣と同様に築地が鉄骨造、桁以上の小屋組が木造である。築地は鉄骨の骨組みに竹木舞下地を施し、土壁中塗仕上げで版築の表現とした。屋根勾配は4.5/10で、軒の出は大垣心から2.5m（8.5尺）、棟高は5.6mである。屋根瓦は軒丸瓦6308B、軒平瓦6663Aを復原、模造して用いた。

穴門 南面大垣の南門東に開く小門である。間口は4.5mで、築地高さ3.5mに対して、3.1mを開口とし、門の上にも積土を持つ構造とした。門柱は直径42cm（1.4尺）、内法高は2.5m（8.5尺）で、幅1.4m（4.8尺）の扉2枚を建て込む。

南門 第243・245-1次調査で検出されたSB16000Cである（年報1993）。桁行5間、梁間2間で、柱間は桁行中央が13尺、両端間と梁間は10尺である。これを五間三戸の単層切妻造の門に復原した。造営基準尺は1尺=30.0cmとして設計した。基壇は東西20.4m、南北9.3m、基壇高さは門内外の造成地盤高の差により北側で約60cm、南側で80cmである。柱の高さは4.0m（13.3尺）、直径48cm（1.6尺）、軒高4.5m、棟高7.2mである。小屋組は三棟造で妻飾は二重虹梁蓐股とする。組物は平三斗で、軒は二軒、出が7.2尺である。各部材の寸法は、法隆寺東大門の比例を参照した。屋根瓦は軒丸瓦6133D、軒平瓦6704A、鬼瓦VIAを復原、模造して用いた。

東面大垣 東院地区の東を限る大垣である。整備計画115mのうち、平成6年度は北端から84m分が竣工した。第245-2次調査で、築地の基底幅は9尺、東外側に4尺の犬走りと東雨落溝が検出されている。構造および復原寸法は、南面大垣とまったく同じである。敷地の南下がり勾配は、築地基底と屋根の2段階で調整した。

北東建物 第110次調査で検出されたSB9081である（年報1979）。桁行3間、梁間2間の礎石建、瓦葺の東西棟である。柱間寸法は桁行が11尺、梁間が10尺、復原造営基準尺は1尺=29.6cmである。円柱座付の礎石が出土しており、その円柱座径から柱の底径は1.4尺に復原した。柱高さは3.3m（11尺）で、軒高3.5m、棟高6.6mである。構造と寸法は法隆寺食堂を参照して復原を試みた。園池の北に建つ亭的な性格の建物であったとの解釈から、東西の妻面のみを壁とし、南北を吹き放しとした。小屋組は妻を二重虹梁蓐股、内部を叉首組とした。組物は大斗肘木で、軒は二軒、出が5.7尺である。屋根瓦は軒丸瓦6282B、軒平瓦6721C、鬼瓦VAを復原、模造して用いた。

構造補強 南門および北東建物では、柱足元と壁体、屋根面に構造補強を施している。

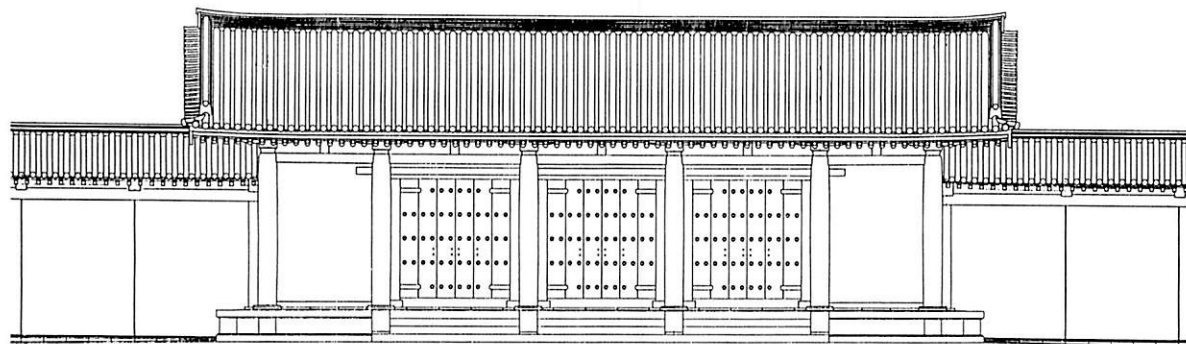
柱足元の補強には、鉄筋コンクリート基礎上に立てた高さ1.1mのステンレスアンカー（幅8cm）を用いた。これを、礎石を貫通して柱に70cm差し込み、柱側面からボルトを差し通して固定している。

壁体の補強には、木質系積層壁とステンレスパネル補強の2種の手法を試みた。木質系積層壁は、各柱間の地覆と頭貫のあいだに木製枠を組み入れ、60cmピッチの格子に厚板を落とし込む。厚板は左右を格子に実じゃくり、上下をダボで繋ぐ。またステンレスパネル補強は、木質系積層壁と同様の木製格子に、角盆形のステンレスパネルをはめ込み、四辺を釘止めする。いずれもこの上に、ラス下地をはり、下地モルタルにしっくい塗で仕上げた。木質系積層壁は南門の両妻壁、ステンレスパネル補強

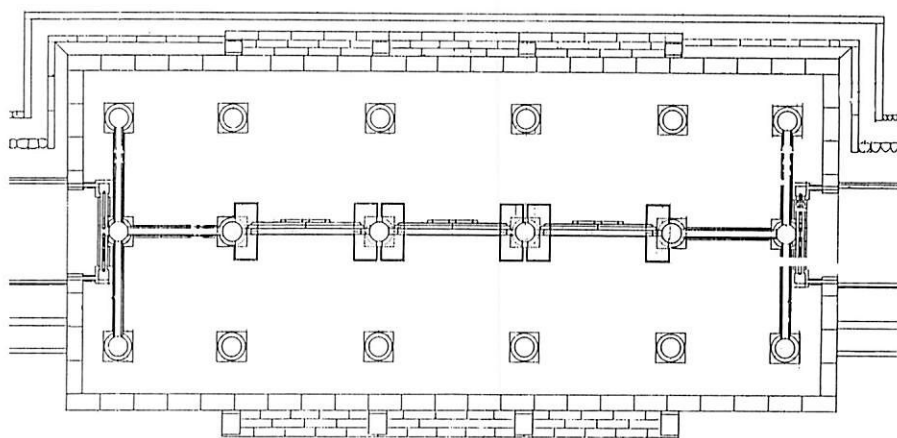
は南門の棟通り両端間と北東建物の妻壁・小壁に用いている。

屋根面の補強は、裏板と野地板の間に鉄骨フレームを挿入した。フレームは棟木と柱通りの母屋桁の位置で支持している。この鉄骨は枯木の役割を果たし、水平力に耐えるとともに、軒の垂れに抵抗する。

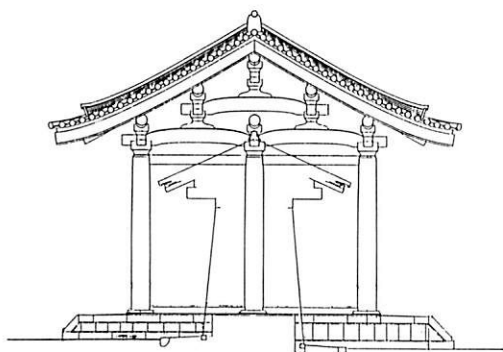
(長尾 充)



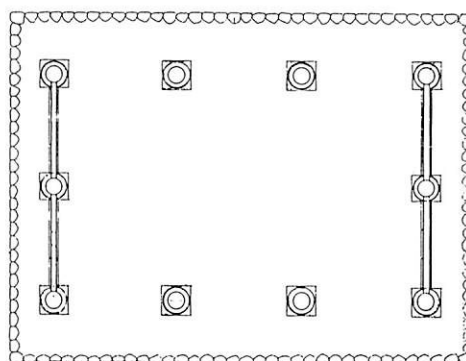
南門正立面図 1 : 200



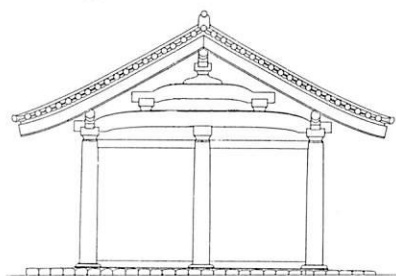
南門平面図 1 : 200



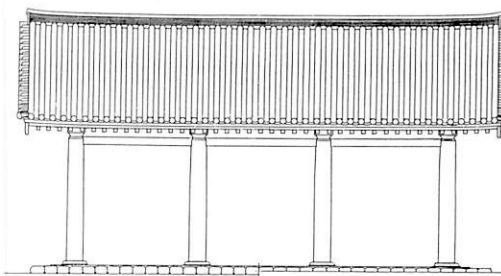
南門側立面図 1 : 200



北東建物平面図 1 : 200



北東建物側立面図 1 : 200



北東建物正・背立面図 1 : 200